「図書館を大学教育課程の中へ位置づけよう」

図書館主任司書・講師
漢那　憲治

最近『知的好奇心』という書が好評を博している。それは、「人間は怠けものでなく、本来知的好奇心の強い活動的な存在である」と、実証的に展開しているからに外ならない。このことは学生諸君に大いにあてはまる。ここで、学生がより能動的になり、勉強へと「内発的に」―試験とか成績とかのためでなく―動機づけられるような教育内容・方法を盛り込んだ教授―学習が行なわれてもいい頃でしょう。しかし、その為には先ず、知的好奇心を満たすべき「情報資料」を収集・組織し利用に供する図書館の充実整備が叫ばれなければならない。現在蔵書基準冊数に一応達しているものの充実も学生・教師の積極的な参加がなければ、空しい叫びになる。即ち、図書館を大学教育課程へ統合せしめ、学生・教師の大なる利用があってはじめて可能になるといえる。

学生の当図書館利用状況を、後期になって帯出された八八冊の図書にスポットをあてると、目的として「受講しているクラスに資する」が二二冊、「教養・娯楽」が六六冊、又、動機として「教師に奨められた」が七冊、「友人に奨められた」が八冊、「自分で選んだ」が七三冊という状況であった。これから分るように、自分自身の「教養・娯楽」のために利用しているものが圧倒的に多く、講義に資するものが少ない。その比率は七五%対二五%で、本来ならば逆になるのが正常である。また、帯出する図書の選択の殆んどは学生自身でなされており、教師の奨めによるのはわずかである。これらのことは、まだ図書館利用が教師によって教科課程に組みこまれていないと同時に、学生が現状のテキスト依存の講義・クラスでの講義に満足し、そこからの発展が見られないという消極的な学習姿勢の証左を意味するものであろう。

図書館が大学の「心臓部」と呼ばれ、大学教育のプロセスに参加統合されて、教育に内容と方法を与える役割を果すように、学生・教師の図書館への正しい認識と、その利用への積極的な参加を喚起したい。

―※―

同窓会報告

会長　花城　安夫
（八期生）

念願であった同窓会運営資金が皆様の御協力によりなんとかまとまりました。これを基に同窓会活動の一環として去る十一月二三日にピクニックを実施した。忙しい時節であったが、二十余名の方々が参加してくれた。中には学院卒業生同士で結婚している七期の中村君や九期の新垣君、仲宗根君夫妻がそれぞれ子供を連れ家族ぐるみで参加してくれた。そのせいもあり家庭的な楽しいムードで一日が過せた。単なるピクニックだけではなく、こんなに有意義に親睦ができたのは久しぶりであった。

ここに現役員と各期の代表者名を書き添えますので、同窓生は是非連絡をとってもらいたい。特に連絡先（現住所）を確にして下さい。

現役員及び連絡先

会長	花城　安夫（八期）	
愛隣園	太田　守昭（十期）	098995―2357
副会長	沖縄ホンダ	77―2558
沖縄ホンダ	比嘉　良江	
会計	コザ聖母幼稚園	098937―7065
キリスト短大	仲村　正隆	32―5161
書記	西銘　純子	
キリスト短大		32―5161

各期代表者及び連絡先

一期	砂川　敏子	
豊見城村字嘉数八五		33―5133
二期	小橋川米子	
与儀保育所		34―0962
三期	知花　真康	
真和志教会		33―5133
四期	知念　光弘	
琉球新報社		33―1131
五期	伊舎堂守雄	
沖医理科産業		55―2409
六期	仲真　良哲	
キリスト短大		54―1131
七期	仲宗根盛康	
嘉手納中学		098976―2263
仲本　和子		
大道保育所		54―1017
十一期	翁長　功	
若狭商事		68―4185
糸洲　洋子		
自宅		34―1673
十二期	小浜　妙子	
百合ヶ丘保育園		57―2212
十三期	成島　弘子	
泡瀬聖母幼稚園		098937―3598
十四期	仲本　順子	
北谷村第二保育所		098936―1657
十五期	徳田　和子	
愛泉保育園		33―5133

学内人事移動

一、七月一日付
教務部長　小橋川寛教授（再）
学生部長　前里光盛助教授（新）

二、十月一日付
一般教育主任　松田定雄教授（再）
英語科々長　金武美代子講師（新）
保育科々長　久野真智子助教授（再）

―紀要紹介―

沖縄キリスト教短期大学紀要第一号が十一月十五日発行された。執筆者は新見宏教授（聖書学）、金武美代子講師（英米文学）、F・久野真智子助教授（保育学）、F・Quisol 講師（キリスト教幼児教育）の四氏である。

※訂　正

学報第五号第四面事務局便りの人事報告四のA(3)サンフォードE・テイボーン、英語科専任（一九七三年十月一日付）を九月一日付に訂正。

一九七四年度 学生募集要項

一、募集人員　英語科（一〇〇名）
保育科（五〇名）

二、願書受付期間
一九七四年二月一日（金）～三月七日（木）
午前九時三〇分～午後四時三〇分（月～金）但し、土曜日は午前中

三、試験日
一九七四年三月十三日(水)、十四日（木）本短大にて

四、試験科目
現代国語・小論文・社会（倫社か政経を選択）・英語・ヒヤリング（英語科のみ）歌唱及び器楽（保育科のみ）

五、提出書類及び受験料
(イ)入学願書（本短大所定用紙）
(ロ)調査書（出身学校所定用紙）
(ハ)健康診断書（本短大所定用紙）
(ニ)戸籍謄本
(ホ)出身学校の卒業証明書
(ヘ)受験料　五千円

六、学費及び諸納入金
(イ)入学金　五万円（入学時）
(ロ)授業料　六万円（年額）
(ハ)施設充実費　六万円（〃）
(ニ)維持費　五千円（〃）
(ホ)後援会費　三千五百円（〃）
(ヘ)実習費　実費
※(ロ)、(ニ)は前後期に分けて半額づつ分割支払いもできます。

沖縄キリスト教短期大学報
1973年12月20日　（第6号）
那覇市首里当蔵町3―6―1
沖縄キリスト教短期大学
電話 32―5161
発行人　平良　修
編集人　学報編集委員会
印刷所　協栄印刷株式会社
電話 33―4853

交わりを深めるために

保育科助教授
比嘉　盛二郎

数年前のクリスマスシーズンにおこなわれた当短大の礼拝の説教で、教育職員の一人であったある宣教師が次のような指摘をされたことがあった。「最近、街をあるいてどうも気になることが一つある。それは商店街にはん濫しているXマスセールやとかかれた看板である。エックスマスセールというのはどうも意味がわからない。たぶんクリスマスセールの意味なのだろうと思うが」と皮肉たっぷりに指摘されたあと、「心ない商人たちによって、クリスマスがこのようにゆがめられ、神の子の御降誕を信仰をもって厳しゅくに祝うべき日を、このように商業主義によって毒されるのは悲しい」と結ばれた。

毎年クリスマスを迎えるたびにこのことばを思い出し、考えさせられるのである。かつてはキリスト者の間でひっそりと守られていたクリスマスが、戦後のキリスト教ブームによって急速に一般化した。しかしそれは福音が土着化したということではなく、クリスマスの世俗化でしかなかった。つまりそれはキリスト不在のクリスマスであり、信仰の内実を伴わないクリスマスなのである。それは過越の祭りを利用してエルサレム神殿を強盗の巣にした商人たちのように、飽くことなき現代商人に利用され、世の酒好きな男性群に飲む口実を与えているにすぎない。

「神の言が肉体となって、わたしたちのうちに宿った」ということは、神の言が世俗化したということではなく、神の言が神のことばとして肉の姿をとりたもうたということである。したがってそれは我々が神の言であるキリストにあって生きることであって神の言をXマスにさせてはならない。

当短大は創立以来ことしで十七回めのクリスマスを迎えた。創立当時は首里教会が学びの場であり、わずか二、三十名の全学生と十名そこそこの教師が初代学長であられた仲里朝章先生を囲んで、ささやかなクリスマスを祝ったものである。それはまことに家庭的でなごやかなクリスマスであった。

現在の場所に本館ができてからは、二階の大教室（!）つまり現在の二〇一の教室が祝会の場となった。もちろん礼拝もそこでおこなったのである。学生数もぐんと増え、教師も家族づれで参加し、豪華なオードブルがテーブルをかざった。祝会の余興も凝った演し物がおこなわれるようになった。

そして現在、二号館のホールが完成してからはその内容、規模、参加者数も飛躍的に大きくなった。創立当時に比べ、まさに隔世の感がある。沖縄キリスト教短大の発展の歴史をここに見る思いである。

しかし、ここで思うことは短大の成長、発展に伴って、その初めの建学の精神がしだいに失われつつあるのではなかろうかということである。本短大は当初、真に人々に奉仕する人材を世に送り出すべく、キリスト教精神に基づく少数教育をモットーとしてきた。創立当時は文字どおり教師と学生が一対一で授業がおこなわれたこともあったほどである。しかし時代の変遷とともに短大の規模はしだいに大きくなり、学生数も年々増え、それとともに少数教育による実をあげることがしだいにむつかしくなってきた。当然のこと学生間の交流もしだいに困難になりつつあるとの悩みを耳にするようになった。特に施政権返還後は短大設置規準に照らして更に規模が大きくなろうとしており、その初志を貫くことはいよいよ困難になるものと思われる。もちろん学生数の増大に伴って教育職員の数も充足されつつある。しかし、少数教育のよい点は一対一の教育が可能であるということである。

それが学生数が増えればそれだけクラスも増えることになり、したがって学生個人個人と接する機会が少くなることは自然である。そこで現状を打開するために、今年からアドバイザーシステムを試みているが、これとても時間的に限界があるようである。

マンモス化（?）しつつあるキリ短の悩みである。要は二律背反する現状にあって教師と学生ができる限りお互いに接する機会を多く持つように心がけ、対話の機会を絶えずつくり出すように努めることが大切だと思う。クラスやアドバイザーシステムの時間だけでなく、普段の交わりが大事である。

クリスマスを迎えて思うことは、この世に肉の姿をとりたもうたイエスは常にひとりびとりと人格的交わりをされ、ひとりびとりを重んじられた。そこに断絶した交わり回復するために受肉されたキリストの愛の姿がある。短大の今年のクリスマス、それは神との交わりを回復し、お互いの交わりをよりいっそう深めるクリスマスでありたいものだ。

「生きる」 ―第六回OCJCキャンプ―

◇　第六回目のOCJCキャンプは福岡女学院
◇　短大から五人の学生を迎えて、「生きる」―
◇　私の可能性を求めて―をテーマに開かれた。
◇　キャンプは「これでよいか」という反省と問
◇　いの中で学生は何を感じ考えたであろうか、
◇　四人の学生に「生の声」を語ってもらった。
◇

OCJCキャンプに参加して

福岡女学院英語科
二年　金丸　篤子

沖縄から帰って、またたくまに日がたってしまいました。ただ、不安な気持ちと緊張感で一ぱいになって、沖縄に向かった私。とても、満足できる様な行動をとったとは思えません。これで良いのかしらというままに、いつのまにか終わってしまった様な感じさえします。でも、改めて思い直して、私に言える事は、ほんとうに、キャンプに参加できて良かったという事です。全く、私たちの修養会とは違うものでしたが、あんな形式も、意義がある様に思えます。

キリ短の皆さんをみていると、私たちが、なんとなく恥ずかしくなってしまいます。あまりに、平和でぜいたくに過ごし、そのことに慣れてしまっているのではないかと感じます。ある意味で、私たちは、もっと大人になるべきではないでしょうか。ただ、のんびり過ごすだけではいけない気がするのです。私が、キャンプに参加して得たものは、テーマとなっていた〝生きる〟そのものでした。人それぞれに、考えはあるでしょう。でも、私が、今、言いたいのは、私は、この時を、必死で一生懸命生きていきたいという事だけです。

あまりに短かい期間で、皆さんの外見にふれただけにすぎないのかもしれません。しかし、わずかにしても、皆さんと知りあえた事を、大切にしたいと思います。きっと、良い経験になるでしょう。ほんとうに、いろいろお世話になり、ありがとうございました。私たちは、とっても幸せです。これからも、キリ短と福岡女学院の友好が長く続きます様に！

福岡女学院英語科
一年　戸田　佐恵子

時が経つのも早いもので、沖縄のキャンプに参加した日から、約一ケ月が経とうとしています。つい先日、私達の学校で秋季修養会があり、正式に報告したところです。その原稿を読みながら、いろいろな事が、なつかしく想い出されました。思えば、ほんの三日間でしたけれど、数々の事を経験したものです。実のところ、私は、沖縄に行く前、「沖縄ノート」という本を読んで行き、とても不安だったのです。あの本をお読みになった方は、理解していただけるかと思います。ところが現実は、そうではありませんでした。快く迎えられ、本当に楽しいキャンプだったのです。そんな中にあって私は、平良先生に、沖縄における諸問題を、伺ったのでした。私達のグループで話し合った「主体的に生きる」とは、決して、単に個々ににおける問題だけではなかった。と、今感じているところです。

今の沖縄は、どうでしょうか、福岡は、とても寒くて、そちらの温さが思い出されます。

青空の下でのこと

英語科一年　兼村　実

OCJCキャンプについて是非の論がかまびすしい（失礼！）昨今であるが、ぼくにはとにかく楽しい一時だった。

参加者が少ないとか毎年多少の問題はあるにせよ、学友と共に青空の下で過す数日は素晴らしい。教室の授業ももとより結構であるが、現実的には肩書を得るための日程消化という薄汚い一面があるのも否めない。この隠微な不明朗さを切り崩すためにも、区々たる価値観をすて、道端の石ころの様に、ただそこにそのままあるという状態から、生そのものを新しく把みなおすのもおもしろい。この優越も何にも持たないで、ただ共に路傍に座っているだけで愉快なんだという考えは究極的には誰にとでも、何とでも仲よくやっていく連体の思想につながる。そこに、ぼくはキリスト短大共同体のキャンプの意義をみいだしたい。

勿論、キャンプの意義については、各人多少の出入りはあるだろう。だが多くの学友の間に、「楽しかったワ」「今後も続けてほしいネ」という声がある以上、その存在価値を疑ってはなるまい。教授会にもキャンプ廃止の意見があるそうですが、今後は前向きの姿勢で「みんなが参加するキャンプ」を造りたいものだと思います。

保育科二年　瀬底　和美

〝OCJCキャンプ〟学園生活において、楽しい行事の一つである。職員も学生も日頃の役割を忘れ、まるで別荘地へでも行くような実に愉快な気分である。職員と学生が一緒になり、同じ光を見つめ、進んでいく。広く青いグランドで、思いきりはね回り、歌い、そして星空を天井に語り合う喜び。そんな喜びも決して自分一人だけで作ったものではなく又味わえるものでもない。職員と学生の一人一人でつながれた大きな輪の中で芽生えたものなのである。

私達一人一人がまきとなり、あのファイアーのごとくに、学園生活を、青春を赤く燃えさせ、青空高く、のびていきたい。そして冷えきった回りをもあたためていきたい。

学校において、クラスにおいて、お互いにふれあう機会がもたれないというよりもそれを避けて生きているように思える毎日。しかしキャンプでの一時は、始めて顔を見合わせるような人々ともスムーズに語り合えた。表現はできないが、私達はそこで素晴らしい生を経験した。

三無主義などと言われ、とかく私達は作られたものへ飛び込んでいく。作られたものへの参加ではなく、私達一人一人が作り上げていくキャンプに参加していこう。皆で作り上げ、共に歩み、前進していく、そんなキャンプでありたい。来年も素晴らしいキャンプを期待して!!

学院祭 ―ふれあい―

学生会長　小波津　隆

今年の学院祭のテーマは「ふれあい」である。全学生に呼びかけ、テーマを募って選ばれたものであるが、私はこのテーマが決まった時、「今年もか」と思ったのである。昨年の学院祭テーマ「原点を見つめ、新たなる創造」と同じことではないかと思うのである。今年のはそれをもっとひとりひとりの胸に入りやすいことばにしただけのことのような気がしてならない。

だが現在のキリ短の中からはこういうたぐいのテーマが出て来るのは当然のことであり、出ない方が不自然なのだろう。入学した当時私は何ものかの期待を持っていた。このキリ短にである。しかし、その期待も入学後一ケ月足らずで消え去ってしまったのだ。

講義の済んだ後のキャンパス？を見ているとただなんとなく心さびしくなっていた。そこには学生の姿がないのだ。自分の講義が終ればさっさと学内から消えてしまっている。大学とはこんなものなのかと思うと私は悲しくなる。何がいったいこの学内にいさせなくしているのか何度も考えて来た。そして今も考えているのだがその答えは出てこない。私は今、「ふれあい」のテーマの下で催される学院祭が何らかの形で解決の糸口を見つける手がかりとなることを期待している。

「ふれあい」は偶然でしょうか。これはある講義の中でこのキリ短で学生と共に学ぶことができた、ふれあうことができたということを共に考えてみようというので先生が話された文句である。私がこのキリ短にふれることができたこと、多くの学生と共に学ぶことができること。私はだいじにしたいのです。このふれあいを。

この小さなキリ短において「ふれあい」が無いということは何とさびしく、悲しいことだろう。我々はもっと自然にふれあい、よりよい学生生活をおくりたいものである。

キリ短の上に「ふれあい」の種はまかれた。それが芽を出し花をつけ実を結ぶことができるか、それは我々の胸の中ひとつではないだろうか。この小さなキリ短にまかれた種からやがてこの社会のいたるところに同じ芽をふかせ実を結ぶことができることを、我々は期待し、努力したい。

学院祭を終えて

英語科二年
上里　真知子

〝ふれあい〟をテーマに行なわれた九回目の学院祭、いろんな反省すべき点はもちろんあるが「とにかく終った」そんな気持でいっぱいの現在である。

ところで、今回打出されたふれあい〟というテーマは失われつつある人間関係をみつめ取戻そうという主旨のもとに設定されたのだが、学院祭においてそのテーマは生きていたであろうか。レク研のように対話を中心としてふれあっていこうとしていたところもあったがアンケートを見た限りにおいてはテーマを感じないという人が多いのである。しかし少数ではあるがテーマを身近に感じ、その重要性を感じとってもらえた人もいるのである。少ないとはいえそういう人がいたということからしても学院祭は成功だったといえるのではないだろうか。

九月に入るとすぐに今回の学院祭の取り組みをはじめたが、テストやO・C・J・Cキャンプなどでなかなかみんなの足並がそろわなかった。その上準備から実行に移る段階では人員の確保ができなく、とどこおりなく学院祭を行えるかどうか懸念されたものである。例年のことだと思うが、一週間前ともなると毎晩おそくまで残り、時には実行委員全員が徹夜をして実行に移し、そしてやっと終った第九回学院祭である。

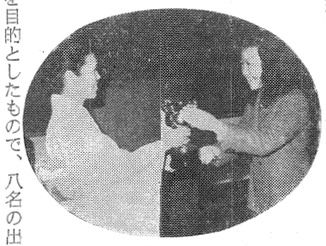
しかしながら決して十分に運営できたわけではなく、もう一つムードがもり上らなかったのは確かである。また、だれが学生でだれが一般客なのかわからないという問題もあり、次回からはリボンをつけるとか、腕章をつけるとかいった工夫が欲しいものである。とくに次回は十周年を迎えることでもあり、今回の学院祭を踏台として、より充実した学院祭が開かれることを、そしてより多くの学生が実行委員となってくれることを学院祭にたずさわった二年生として一年生に伝えたいものである。

ヴィジョン杯 英語スピーチ・コンテスト

―英語科主催―

十一月二十四日、英語科主催の第一回「ヴィジョン杯スピーチ・コンテスト」が行なわれたが、英語科一年の内間留美子さんが、「Three Main Traits」という演題で、見事、優勝杯（Vision Cup）と副賞一万円を獲得した。

同コンテストは、本短大学生の英語による発表能力を高めることを目的としたもので、八名の出場者が、新館四〇一号教室いっぱいの聴衆を前に熱弁をふるった。出場者は、英語科から、兼村実、金城淳子、荻堂きみ子、当銘知子、渡嘉敷冴子、内間留美子、山田裕子、保育科から本村恵美子。

英語科では、**Let's create new visions!** をスローガンに来年もコンテストを開催する予定であり、もっと多くの学生が応募するよう希望している。

英語科の新見宏教授は、このコンテストのための費用として、公開講座の報酬を御寄付下さいました。感謝申し上げます。